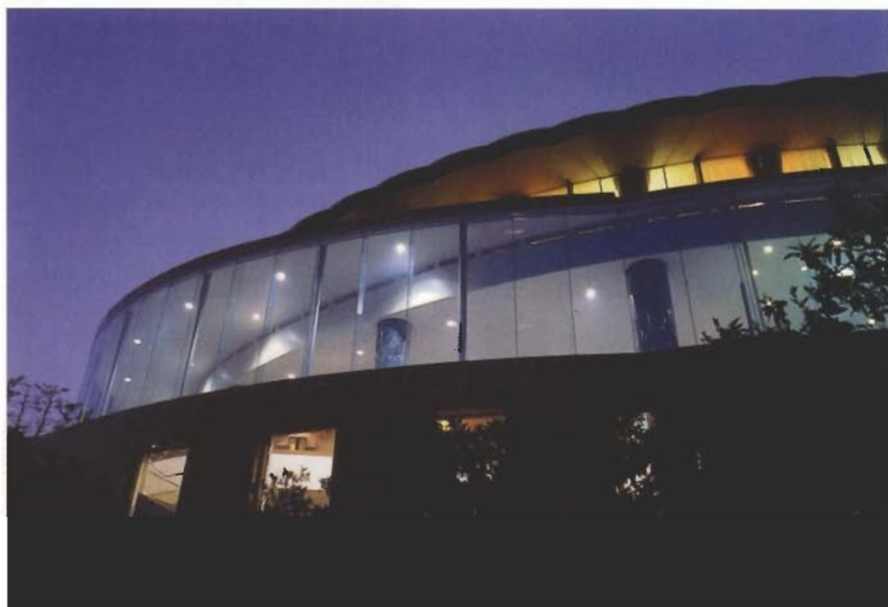


## 佐伯眼科クリニック

財団法人 高齢者眼疾患研究財団



曲線が美しい外観東側の夜景（撮影＝「新建築写真部」）

### ホテルか？ホスピタルか？ 患者さんに真っ先に 見てほしいもの

「佐伯眼科クリニック」は、小田原厚木道路の荻窪I.C.から約1分、JR小田原駅からでも、車で10分程度の小高い丘にある。

同クリニックは2,713㎡の敷地に建つ、鉄筋コンクリート一部鉄骨造りの地下1階、地上3階の建物。平均外来患者数は200名/日、病床数は19床で、うち12床は差額なしのベッドである。またここは、真上から見ると「人間の眼球」の形をしているというユニークな建物。

みかん畑に囲まれた丘陵地に建つ、総ガラス張りで大理石の同クリニックは、まるでリゾート地のプチホテルを連想させ、およそこれまでの医療施設とは緑遠い景観をみせている。建物からは小田原市内が一望でき、敷地の南側は小田原城址の丘に連なり、西に箱根山、北に丹沢の山塊、晴れた日には東に三浦半島と相

模湾が望め、夜は先端の江の島の灯台の灯も見えて、あたかも一大パノラマの趣がある。

同クリニックを建設するにあたってのイメージを、佐伯院長は次のように話してくれた。

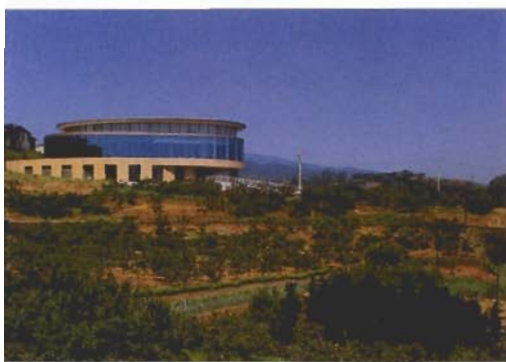
「従来の病院を超えたものをつくりたかった。例えば、自分の収益だけを考えるなら、駅前のビルの1フロアを借りて診療を行えばよい。しかし、それではロマンは実現できない。それに医療施設というのは、患者さんがそこにいらただけで心までおかしくなってしまうことがあるので、治療は疾病だけでなくその心まで治す必要がある。だから患者さんが、病気になって精神的にダメージを受け、卑屈になっている時に、人間の尊厳を思い出すような施設をつくらう。さらに、最先端の高額医療機器を備え、そこに集う医師たちも腕に自信を持ってもらいたい。このようにハードウェア、ソフトウェアともパーフェクトにした医療施設を

「燃えつき症候群で突っ走れ！」  
を標榜し、  
常に眼科医療の最前線に立つ  
『平成のあかひげ』

“ホテル”と“ホスピタル”の語源は同じである。それをつくづく実感させてくれるのが、神奈川県小田原市にある「佐伯眼科クリニック」だ。

同クリニックの佐伯宏三院長は、眼疾患治療のわが国の第一人者として知られる。特に糖尿病を併発している高齢の患者さんの最後の拠り所となっており、マスコミでも「平成の赤ひげ」とたびたび紹介されている。

今回はその佐伯院長から、ホテル級の医療施設を建てた経緯や臨床哲学、人生観などを伺ってきた。



東側から望んだ全景。外壁はベトナム御影石貼り  
(撮影=「新建築写真部」)

つくりたいと考えていました」

佐伯院長は、自分の夢を実現する場所を求めて、あちこち探し回った。現在地に決める前にも“これは”と思う場所がいくつかあったが、いずれも駅から遠いとか、高速道路から離れているなど、交通網が不十分な所だった。その点、今の場所はまことに交通至便であるうえ、緑豊かな景観に恵まれた土地である。

「この場所に立った時、患者さんに手術が終わって良く見えるようになったら、真っ先に緑豊かなこの景色を見てもらいたい、そして新たな希望と勇気を持って再出発してもらいたいと思った」

これが佐伯院長が、ここにクリニックを建てようとした大きな理由である。

## 心安らく アメニティー空間

クリニックは1階が待合ロビーと受付、診察室、事務室、医局、2階が手術室とレストラン、院長室、3階が病棟になっている。クリニックの中は医療施設特有の臭いがなく、受付や待合ロビーにも暗い雰囲気がない。大きくとった窓からはたっぷりとした陽光が注ぎ、あたかもそこはホテルのロビーのよう。そして、2階までの吹き抜けの待合ロビーは広々として圧迫感がないので、初めての外来患者さんにも十分安らぎを与えてくれる。

正面玄関から入って右側は、ファッ



2層吹き抜けの待合ロビー。手前が受付カウンター



レストランからの眺望も素晴らしい、リゾート気分です。

ション性のある豊富なメガネフレームとレンズを揃えた「眼鏡相談コーナー」。ここでは技師のアドバイスを受けながら、自分に合った眼鏡選びができる。

待合ロビーから階段で2階に上がったレストランでは、江の島の“湘南ホテル”のcockさんが料理をつくっている。入院患者さんはこのレストランで食事をする。また、外来患者さんや一般の見舞い客もここで昼食をとったり、お茶を飲んだりできる。一般に、病院食は味気なく、しかも重い気持ちで食べるのが常である。しかし、ガラス張りの曲線からの陽光をたっぷり受けながら、豊かな緑と海も山も眺められるこのレストランでは、リゾート気分です。

眼科の入院患者の疾患原因はさまざまで、よく知られる原虫やウイルスだけではない。糖尿病や腎臓疾患から発病する例も多いため、患者さんの食事はその原因病や症状に合わせてつくられているのは言うまでもない。



病棟一般個室



病棟4人部屋

3階の病棟は、病室が大きな窓に沿って配置されている。このため手術を受けた患者さんが、治って眼が見えるようになった時、佐伯院長が望んだように、このクリニックを囲む素晴らしい景観を眺めることができる。

## 眼科医へ導いた映画

佐伯院長は1940年8月、東北大学医学部助教授で外科医を父としてその三男に生まれた。長兄は外科医で次兄は銀行員双子の弟は日本IBMの副社長である。

横浜市立大学医学部へ進んだ若き日の院長は、当初、父や長兄と同じ外科医になろうと考えていた。ところがある日、『ミクロの決死圏』という映画を観て方向転換した。それは縮小化された医師と技術者が患者の体内に送り込まれ、脳腫瘍をレーザーで切除するというSF映画だ。この映画を観ながら院長は、近い将来、医療の世界もこのようになるだろうと予感したと言う。そして脳の分野はも



特殊フィルター使用の準無菌室における  
マイクロサージャリーの手術風景

もちろん、脳の延長である眼科の分野でも応用されることになるかと直感した。

佐伯院長の言葉を借りれば、現在の眼科治療の現場はまさに「ミクロの決死圏」の世界であると。

「眼の中に機械が入り、顕微鏡で患部を見ながらライトで照らし、レーザーやマイクロカッターで手術している」

佐伯先生は69年横浜市立大学医学部を卒業し、眼科学講座に入局。77年5月まで同大学病院の眼科講師として大学病院に勤務し、実践を積みと同時に最新医学にも取り組んだ。同年6月から小田原市立病院に移り、以後18年間眼科部長、診療部長として活躍し、同病院時代にカリフォルニア大学の硝子体学教授ドナルド・R・メイや人工水晶体学助教授ウイルマースと共に、最新手術の研究に励んだ。

## 専門クリニック開設を 決意させた出来事

佐伯院長は白内障用の人工レンズを入れる水晶体眼内移植の第一人者。小田原市立病院に移った先生のもとには、その手術の腕を聞きつけて、市内・県内はもとより遠い他県からも多くの患者さんが集まってきた。この中には政治家の故金丸信氏や悪性黒色腫瘍（マリグラント・メラノーマ）で左眼を摘出した服飾評論家のピーコさん、女優の草笛光子さんなど、政財界、芸能界の第一線で活躍している著名人もたくさんいた。

しかし、公立病院の中核にいと小田

原市の関係部署、市議会との折衝、病院と診療の管理運営、看護部などの人事問題などに時間を取られ、患者さんと接する時間が半減してしまう。特に、高齢で眼が見えなくなるというのは、会社を背負っていたり、それなりの社会的立場にいる人にとっては大変なことなので、診療時間が減少するのは問題であった。

「高齢者にいちばん多いのは白内障。次第に眼が見えなくなることも多い。そして緑内障、網膜剥離、悪性腫瘍などの失明に至る疾患もある。特に糖尿病に起因する糖尿病性網膜症はやっかいで、悪性の場合には失明する危険があるので、早期発見と早期治療するのが肝心なのです」

市立病院で忙しい毎日を送っていた佐伯先生に、ある日専門クリニック開設を決断させる出来事が起こった。それは、ある老婆の死であった。その老婆は、佐伯先生の眼疾患手術の腕前を紹介したテレビ番組を見て、糖尿病の眼を治してもらおうと千葉県からタクシーを飛ばしてやってきた患者さんだった。千葉では大学病院など数軒の眼科を回ったが、どこでも「糖尿病がひどくて手術は無理」「手術してもこれ以上良くならない」と言われて諦めかけていた時に、そのテレビ番組を見たのだという。しかし、他にも大勢の患者さんがいるので、今日の明日に手術するというわけにはいかない。調整がつくまで待ってもらうことにした。

ところが、一段落して千葉の老婆の自宅へ連絡したところ、その家族に「先生に手術してもらう前に、お婆ちゃんは天国へ行ってしまうました」と言われてしまったのである。

その時、佐伯先生はこう考えた。

「戦後50年、家族のため、社会のため、そして国のためにトップスピードで働いてきた多くの平凡な人々。その人たちは、



N A S Aでも通用するクリーン度を有する手術室

今80歳代近くになって眼が悪くなってきている。その人たちに“ご苦労さまでした。日本の国をここまでしてくれたのはあなたの方です。今日まで本当にご苦労さまでした”と感謝すると共に眼を治して、残りの人生を元気いっぱい歩ませるのが私の仕事だ」と。

しかし、それを公立病院でやろうとすればあまりにも制約が多く、手術や患者さんを診るただけに時間が使えない。眼科医として本気で患者さんに尽くそうとすれば、自分が診療に専念できる環境をつくらなければならない。そこで1995年、ついに「佐伯眼科クリニック」を開設するに至るのである。

## 浪花節だよ人生は！

最新の医療施設と最高の環境、そして誰もが受診できる「佐伯眼科クリニック」だが、その時は建設資金がなかった。しかも時代はバブル崩壊後で、銀行は担保のない院長にはなかなか融資してくれない。しかし以前、佐伯先生のもとで眼の手術を受け、自らも患者の苦痛を体験し、一人でも多くの方に光をという熱意に共感した某銀行の故会長が、腕を見込んで融資を引き受けてくれた。「佐伯の夢を叶えてやれ」が、故会長の後任頭取への遺言であったという。融資金額は33億円である。

「ピーコにも言われたが、小田原一の借金王になってしまった。この借金は私一



糖尿病性網膜症などの硝子体手術の準暗室下の手術風景

代では返済できないので、あとは子供たち(1男2女)に任せようと思っている(笑い)。金利は一日いくらと思うと腹が立つけど、それは脇に置いて、一つ頑張れば一人が見えるようになる。だからもう一つ頑張ろうと考えてやっているところだ」

## 最新鋭の手術室

佐伯院長の自慢の一つに、2階の手術室がある。ここはクリーンルーム(無菌室)だが、並のクリンルームではない。

「眼の手術で一番怖いのは細菌やカピウイルスによる感染です。眼は細菌やカピウイルスに弱いので、手術がうまくいってもそれらに感染すると取り返しのつかないことになる。当院の手術室はNASAの研究所でも通用するクリーンルームです。そして、手術の状況も手術室人口のモニターで、家族に公開しています。これでご家族も安心するでしょう」

ともすると、個人病院は大学と交流がなくなりがちなので、同クリニックは横浜市立大学医学部眼科学教室の関連病院であり、教育施設の一環としても機能するようにしている。現在、クリニックの3名の医師はローテーションで同大学からきて、ここで臨床的に勉強して腕を磨



手術室にて。佐伯院長(右)と宮田先生

き、大学へ戻って後輩の指導にあたりている。

また、佐伯院長は同クリニック開設と同時に「財団法人高齢者眼疾患研究財団」を設立し、理事長に就任している。これは、故金丸信氏が妻の遺産の一部を財団基金として寄付してくれたので、それを高齢者の眼疾患治療に生かそうと考えたからである。

## 臨床哲学……… 医療の前では皆平等

佐伯院長から18年間の小田原市立病院勤務で培った、臨床哲学を披露してもらった。

「臨床というのは、自分が医師という専門の知識を持ちながら、患者さんの立場になって考えれば、自ずと治療方針は決まる。ガン患者へガンの告知をするなど難しい問題もあるが、それも患者さんに何をすればいいか、患者さんの身になって考えれば解決する。私は若い医師に、自分の親か子供の眼を診るつもりで治療にあたりなさい。そうすれば間違いないと指導しています。それから、医療の世界には“ごめんなさい”という言葉はない。だから謝るような医療ミスは絶対に許されないとも。

そして、人間は裸にすれば金持ちだろうが教育があろうがなかろうが関係ない。一人一人皆同じ。医療に身分は関係ない。だから医師は患者さんを一人の人間と考



クリニックオープニングパーティー。ピーコさんやプロデューサーの石井ふく子さん、草笛光子さん、脚本家の橋田壽賀子さんたちと。中央が佐伯宏三院長、右が奥様

え、等しく自分の持っているマキシマムをその患者さんに提供すれば良いのです」

普通、医学は10年経験を積んでやっと人口に立つもので、それはどの診療科でも同じと佐伯院長は言う。しかし、大学出たての若い医者にはかかった費用を早く取り戻そうとすぐ開業し、儲けに走り、医療訴訟で負けるのが恐いため、糖尿病性の眼疾患のような難しい手術を、リスクを冒してまでしないようになった。本来、もっと現場で修業して腕を磨かなければいけないのだ。

## とことん 燃えつき症候群！

「今、燃えつき症候群のことがとやかく言われているが、燃えつき症候群、たいへん結構。日本人の平均寿命は男が78歳、女が83歳なので皆そこまで仕事もやれ、頭も聡明のまま行けると思っている。ところが、人間は70歳を過ぎると記憶力が悪くなり、腰が曲がったりしてトップスピードで走れなくなる。それなら人間は出し惜しみしないで70歳までトップスピードで走るべきだ。それが人間として自分が生きてきた証です。

自分が死ぬときに“俺の人生は何と華々しく素晴らしかったのだろう、満足だ、アバヨ”と言って死ぬのが一番。そのためには出し惜しみしないで突っ走ることで」と、自らの生き方を語る佐伯宏三院長であった。